葬送儀礼の現状を考える ⑧

葬送儀礼とお墓 ②
——浄土真宗とお墓——

浄土真宗本願寺派 総合研究所

■はじめに

前回の「葬送儀礼とお墓①——お墓の現状——」では、時代や社会に応じて「死」の意味が変化して「個人化」が進んだこと、さらに火葬という方法が普及することで墓制も「多様化」しているという現状を報告しました。

今回は、お墓の役割についての歴史的な転換に着目し、浄土真宗のお墓がどのように形成されてきたのかについて考えてみたいと思います。

■仏塔と供養塔

仏教における塔には、仏舎利（釈尊の遺骨）を収納するための仏塔と、死者納骨のための供養塔があります。塔とは、インドの「ストゥーパ」の音訳とされ、元々は仏舎利を安置した上に土石を積み上げて作られた墳墓（死者を葬った場所）を意味していました。日本で自分の墓に石塔を建てるように初めて言い残したのは、源信和尚の師であり、『極楽浄土九品往生義』などを著した慈恵大師良源（912～985）です。『慈恵大僧正御遺告』によれば、この石塔は、自身の死後も遺弟らが礼拝供養するためのものとされています。

平安時代から鎌倉時代にかけて、極楽浄土に往生してさとりを開こうとする浄土教の思想が深く社会に影響をもたらし、貴族は墓地に寺院を建立し、武家は氏寺、三昧聖は墓寺を形成するなど、さまざまな人たちが葬送に関わるようになりました。それに伴い、火葬後の遺骨を寺や墳墓などに納める習俗が拡がっていきました。そして、墳墓には石塔が建てられるようになりました。墓石の形態としては、五輪塔、宝篋印塔、無縫塔[ii]、石仏、舟形、角柱、不定形など様々なものがあります［勝田2012、225頁］。

12世紀になると、高野山や元興寺などの聖地・霊場などに納骨が盛んに行われ、13世紀頃には、地方にも納骨信仰が展開し、石塔の周辺に納骨されるようになりました。東日本では、板碑に種子（仏や菩薩を標示する梵字）が刻まれ、近畿地方では、集団墓の中心に五輪塔が置かれていたとされています［佐藤2008、131～147頁］。板碑や五輪塔は、死者を供養する役割とは別に、仏そのものを意味し、彼岸への接点となったと考えられ、中世の納骨所や墓地からは、石に経文を刻んだものも多く見つかっています。ただし、中世の墓石には個人名が記されることはなく、墓石を建てることによって墓参が行われるようになった訳ではありませんでした。

■さまざまな墓制と浄土真宗

日本における墓制については、民俗学を中心に、葬法や石塔の有無などから、いくつかに分類されています［新谷1991、41頁］。埋葬地に隣接して石塔が建てられる一般的な事例を「単墓制」と呼び、1人の死者に対してお墓が2つあることを「両墓制」と呼んでいます。「両墓制」とは、遺体を埋葬（土葬）する「埋め墓」と、石塔を建立する「詣り墓」が別々になっているものを指し、関東・中部・近畿地方などに広く分布していました。ただし、全国的に見れば少数であり、近年では火葬の普及によって、消滅に向かっています。

「単墓制」や「両墓制」に対し、「無墓制」という用語があり、墓石が無い場合や、お墓自体を造らない事例を指します。遺骨（遺体）が埋葬された上に墓石が建てられないものを「無石塔墓制」といい、一定の墓地を営み、そこへ墓参するものとされています。

浄土真宗と深く関わっているのが「火葬無墓制」とも呼ばれる墓制です。「火葬無墓制」とは、火葬された後、収骨はしても家単位に墓を造らない形態のことで、近畿や中国地方などに分布しています。浄土真宗の門徒で従来より火葬の村の場合、火葬後に収骨したお骨の一部を本山へ納骨するという特徴がみられます（現在では、お墓を建てる地域も増えているようです）。浄土真宗のお墓については、大谷本廟への納骨と深く関わっていると考えられます。

■親鸞聖人の葬送と大谷本廟

大谷本廟の歴史は、宗祖親鸞聖人の葬送と納骨にまで遡ります。

親鸞聖人の葬送については、『親鸞聖人伝絵』（御伝鈔）洛陽遷化の段にあるように、鳥辺野の延仁寺において、近親者や門弟によって火葬され、大谷に納骨されました［註釈版聖典1059頁］。しかし、覚如上人の『改邪鈔』第16条には、「某 親鸞 閉眼せば、賀茂河にいれて魚にあたふべし」（註釈版聖典937頁）という親鸞聖人の言葉が伝えられています。この言葉は、信心の沙汰を本とすべきことを述べたものですが、特別な葬法にこだわらないでよいという意図も込められていると考えられます［満井2008］。実際には、親鸞聖人の遺骨は当時の門弟の追慕の念から大谷に納骨され、葬送については当時の仏教や浄土教の慣習や文化に則していたと考えられます。

親鸞聖人のお墓については、高田派専修寺蔵『善信聖人親鸞伝絵』（高田本）の絵図によれば、墳墓が築かれ、一基の石塔を中心として周囲を柵で囲い、四角形の台石の上に六角柱らしい石柱を立て、上に笠と宝珠が載せられていたようです。この石塔は「横川形式」といい、良源が考案したもので、源信和尚のお墓もこの形式といわれています［増補改訂本願寺史1―186頁］。

大谷廟堂は、文永9年（1272）吉水に改葬して建てられました。『善信聖人親鸞伝絵』廟堂創立の段の絵図には、六角の堂内に親鸞聖人の木像が安置されていますが、その前面には角柱の笠塔婆が見え、「聖人遺骨をおさめたてまつるいまの廟堂是也」と記されています。また、本願寺蔵『善信聖人絵』（琳阿本）の同段には、六角の堂内に石塔（笠塔婆）のみが描かれています。

親鸞聖人の墓所として造営された大谷廟堂は、覚如上人の頃に本願寺と公称されるようになりました。ただ、覚如上人の頃には阿弥陀如来像を安置することに関して議論があったとされ、十字名号が懸けられていたとされています。存如上人の頃に両堂が整備されるまでは、親鸞聖人の墓所という性格が強く残っていたと考えられます。

■大谷への納骨と墓石に刻まれる文字

中世末期には本願寺の寺基が各地を転々としましたが、天正19年（1591）に京都に移転すると、慶長8年（1603）に東山五条へ廟所が移されました。それ以降、次第に仏殿などが建造されるなどして、現在の大谷本廟の形に整えられていきます。

『大谷本願寺通紀』第9巻によれば、寛文元年（1661）3月には顕如・准如両上人の墳墓（無縫塔）が祖廟の左右に築かれ、それ以降の宗主墳もその周囲に置かれるようになりました。同年2月には京都西光寺の要請により、大谷本廟への納骨も始められ、廟所の背後にお墓が設けられました。以降、門徒の墓塔が増加し、安永元年（1772）にかけて約8000基に達したとされています［史料集成9―503頁］。一方、自墓が無い場合には、毎年夏に、集められた遺骨が祖墳の後方の地に葬されました［同前］。また、安政3年（1856）には墓塔が12000基余りに増加しています［『教海一瀾』410］。ただし、『故実公儀書上』によれば、石塔の形などについては決まりが無く、施主の意向によって建てられていたようです［史料集成9―750頁］。

お墓に墓石を建てる場合、各時代の死者観念や社会状況に応じて、そのあり方はさまざまに変化してきました。中世では個人名が刻まれることはありませんでしたが、15世紀頃から墓石に法名などを刻むことが急速に普及するようになります。元禄期（1688～1704）頃には単名から夫婦連名に変わり、天保期（1830～1844）頃には家名が、明治時代には家制度の構築に基づいて「先祖代々」と刻まれるようになったといわれ［新谷2007、61頁］、個人の墓から家墓へと次第に転換していきました（家墓については2016年『宗報』4月号「葬送儀礼とお墓①」参照）。

そして現代では、家制度が解体されるにつれて、墓石に刻まれる文字は「家名→宗教語・任意語」に変化する傾向にあり［井上2003、270頁］、これらと「家名・家紋」とが共存するようになったとされています［内藤2013、175頁］。近年では、故人を記憶に留めようとする強い意識が、墓石に表れていると考えられます。

浄土真宗のお墓には、「南無阿弥陀仏」や「倶会一処」などと墓石に刻まれることが多くあり、そのようにお勧めもしています。仏や浄土を意味している点においては、中世の石塔に通ずる面があって、お墓は仏縁の地となるものといえます。お墓に文字を刻むことは古くから行われてきましたが、名号や経典の語を刻むことには、故人も遺族もともに阿弥陀仏の慈悲に包まれていることに感謝する縁となる意味が含まれています。

■おわりに

先人たちが営んできた葬送や墓制は、教義と習俗とが時代と社会の要請の中で融合しつつ形成されてきました。浄土真宗のお墓は、単に遺骨を収蔵することに留まらず、念仏者として生き抜いた先人に向き合い、その遺徳や苦労を偲ぶ場となり、同時に先人たちを導いてきたみ教えに触れる場ともなります。

劇的に変化をみせる葬送・墓制ではありますが、死をどのようにして迎え、どのように葬送していくのかという課題そのものに関しては、これからも変わることがありません。時代や社会の変化によって変わってきた部分と変わらず伝えられてきた部分を整理しながら、これからの葬送儀礼とお墓の方向性を見いだしていきたいと思います。

葬送儀礼とお墓のあり方を考えることを通して、これまでの葬送儀礼の中で培われてきた血縁、地縁の役割や仏縁について、顧みるきっかけになればと思います。

（浄土真宗本願寺派総合研究所　冨島信海）

【参考文献】
新谷尚紀『両墓制と他界観』（吉川弘文館、1991）
井上治代『墓と家族の変容』（岩波書店、2003）
新谷尚紀「墓の変遷と先祖供養」（『葬送のかたち――死者供養の在り方と先祖を考える』、佼成出版社、2007）
佐藤弘夫『死者のゆくえ』（岩田書院、2008）
勝田至『日本葬制史』（吉川弘文館、2012）
内藤理恵子『現代日本の葬送文化』（岩田書院、2013）
満井秀城「浄土真宗としての「葬儀」の意味」（『浄土真宗総合研究』8、2014）

i　方形の基礎の上に、方形の塔身、笠石を置き、相輪を立てた塔。
ii　台座の上に卵形の石をのせた形の塔。